

# 黄昏

黒川 洋

1と0の数ばかり書いて  
いち日が昏れる。  
深呼吸をすると  
塗料の臭いが鼻をつく  
試運転前の制御室。  
映像のない  
ブラウン管を往来する影。  
電圧 有 無。  
プラス マイナス。  
選別と序列と  
合理化と反合理化。  
二者択一しか与えられぬ  
風景とは何。  
ボタンを押し。

映像を選び。  
制御棒をひねる。  
マシン音の幻聴。  
記憶をめぐる。  
像を結んでいる。  
1と0からはみ出す  
熟練の肉体。  
予見した悪夢がここに在る。  
集合と離散。  
中央集権と逃散。  
暮らしあるもの。  
肯定のために生きて見せ  
否定の重さを知る。  
ニヒルなどどうそぶいてくれるな。  
認めあうことの飢えと不安。  
つきあげてくる。  
胃酸をのみおろし  
まずは  
いっぶくとするか。

# ビジネスホテル

西 杉 夫

隣室の電話の音が  
すぐ目の前のように押しよせる。  
おみやげは何がいいかときいている、  
幼稚園へちゃんといつたかときいている。  
子供がどうこたえたのか  
男はいきなり大きく笑って  
それがびんびんひびいてくる  
この各部屋完全独立の鉄筋。  
ベッドに腰をおろして  
さてもうひとかたづけが待っている。  
小さなデスクに投げだした  
きょうのスーパーまわりの調査表の  
いそいでかきこんだ2、3枚。  
都市から都市へ、  
それはホテルからホテルへの移動だ。  
同じようなベッドのつくり、  
トイレとバスは

これ以上ないほどこじんまりまとめて  
あまりにも似かよった配置。  
小さくひざをかかえて  
毎晩ひとり湯にしずむ。  
だが栓をひねれば熱湯がほとばしる、  
エア・コンを（中）にして  
寒さも暑さもない個室だ。  
翌日また走りまわるだけの  
その最低限のものがここには備わっている。  
ビジネスホテル、  
駅前というわけではないが  
駅から車で10分以上は離れない。  
一泊3000円から4000円、  
年間利用客総数約1500万人。  
あした食堂へおれば  
コーヒーの香りが流れ  
アタッシユケースの男たちが  
だまってハムエッグをつついてるだろう。  
そのひとりとなる隣室の男は  
まだ話しつづけている、  
一日あとに会えるという妻と子供に  
風邪をひくなといっている、  
8時には帰るからとくりかえしている。

## 号外

——獄死した小林陽之助

宮田正平

いつか癖になった横目で  
さりげなく戸口をうかがうと  
二人は ならんで股をひろげ  
ゆっくりと放尿した

〈調べは済んだかい〉

ぼそり 低い腹にしみる声だった

〈はやく出るんだな〉

もたんぞ その体では

明るい陽ざしに青膨れした顔をしかめて

俺は 黙ってうなづいた

見張りの刑事はこっちに背を向け

喫いたくもないバットを

気ぜわしくなくふかしながら

ふりむきもせず 催促した

〈えろう ひまがかかるな〉

君は ほこりだらけの窓ごしに  
つめたく高い秋空を

すつとぼけた面して眺め

俺は たまには小便という奴が

さいげんもなく出んものかなどと

埒もないことを

考えていた

年中 汚れっぱなしのまま

鼻つきあげるアンモニアの

コンクリートの三和土のあちこち

誰がすてたのか

ヒトラーまたは電撃作戦  
連合軍いまや袋の鼠

ダンケルクの戦況を伝える号外の

やけに大きな凸版活字が

尖った俺の神経をかきまわし

いつまでも 重たく

痩せこけた鳩尾のあたりに

問えた

彼だって、はつきりしない。

七〇年、七四年、そして七八年

かれの戦い、かれの判決、さらに上告

時は流れることなく、時はここに沈み、

きりが無いとはいわぬが

影たちが、ドアを押しては去ってゆくんだ。

小父サマと、おれを呼んだ女がいて

彼女の逃亡、不意のおとずれ、いつか遠い日の出産

影たちがちよっぴり語っては帰ってゆくのか。

去ったあとのストープを消すのが、おれさ。

何も考えようとしなくなったおれが立ちあがり

部屋を出て、鍵をおろす。

時おり、もういちどノブを引いたり

ノックをしたり。

もはや若くないおれの胸を叩いて

わが本心を聞かねばならぬと思うのか。

## 部屋

村松武司

やがて拘置される若者だ、  
別れを告げにきたんだね。

おれの小さな事務所の

ガス・ストーブのまえで濡れた靴をあたたためて

ひとの匂いを残して去ったのさ。

親には言えないす。

言えない額まで保釈金が跳ねあがったから、

沈黙のまま冷えていったのは

若者の去ったドアの、不透明ガラスさ。

宇宙は暗くて

それほどにも暗い此処が、おれの部屋。

彼が訪れるようになったむかしを

おれは忘れかけ

# 通過儀礼

長谷川七郎

赤道をすぎて 南へ一時間ほど  
スンダ列島をつらぬく火山帯の島々  
空からみると

円錐形の火口から裾がのび  
海におちこむ手前の寸土を ライステラス 棚田がとりまいている

あれはどのあたりであったか  
アッサムの並木道  
道ばたの家祠を縫ってホタルがとんだ

サテ 焼き鳥と甘ったるい煙草のけむり  
ガス燈と人いきれでこつた返す露店  
浅い麻酔にかかったように  
脳皮に膜のようなものが被さり  
こめかみのあたりが暑気でしびれた

赤錆びた残骸に舟をまわした

だから孤児で しょっちう貧乏でと  
うたうような 明るい面持で  
舵を沖にむけた

セランガン 亀の島にウニを採りに行こうという

\*

夜が更けて ヤシの葉を打つ  
スコールをうつつにきいた  
浜から芝生をぬけて  
コテジにしのんだ  
パンツと胸当てだけの少女が  
仮面劇の行進のような足どりで  
枕元に立った

砂をおとすシャワーの音がやみ  
タオルを投げると  
つやのある髪に 特有なこはく色のはだ  
きらきら光る スグリののような目が  
いたずらっぽくわらった

仮面をつければ たちどころに  
奇想天外なものになりきれる アニメイズム 精霊信仰  
限りなく陽気でやさしい  
耳に赤い花をつけたオンナたちよ  
ドゥカル 馬車の鈴の音にあわせて  
時間だけが 足早にかけすぎる

\*

午後になると  
風がうごき  
浅瀬に白波が立った

芝生のむこう  
赤い三角帆を背に  
今日も少年の兄弟がよんでいる

お前も兵隊であったかときき  
父も死んだと  
真二つに割られ  
珊瑚礁に突き刺さった 上陸用舟艇の

初潮の儀礼はいつであったろうか  
紡錘形の乳房は鋭く張っているが  
乳頭は小さくてまだかたい  
抱いた下肢はなめらかだが  
体毛はまばらで  
腋にふれると  
しなやかな からだが  
怪鳥のようにさけんで反った

枝を張ったバンヤンの木かげのシン踊り  
日の暮れた海をさまよう悪鬼や怪獣  
霊媒祭儀と悪魔祓い  
神話と幻想にみちた島のあけくれに  
稚ないからだをよぎる  
短かい無為の時間をたえることの意味が  
どれほどわかるか

入口のところで引返して抱きつき  
散らした机の上の  
お化けや文字のざれ書きを  
せつせと かたづけ  
ありあわせの贈物をそつと返して  
くらやみに消えた

戸のすきまから熱気が吹きこみ  
雨のあがつたプールサイドから  
ものういガメランの音がながれてきた

\*

裸形にちかいいでたちであつたが  
熱帯の直射日光の下  
カルデラの彷徨で  
時間が失なわれた

切裂かれたジャングルのむこう  
火山灰に埋れて

千年の眠りからひきだされた  
方形に円形をかきねた  
巨大なピラミッド形の仏塔<sup>ストゥーパ</sup>

目をよせると

釣鐘状 格子に積上げられた  
四百体をこえる仏龕の如來  
仏誕から初転法輪 本生譚と  
延々と輪廻を綴つた  
九層の回廊をとりまく浮き彫りも  
ふしぎと神性のない

ふくよかで 人間くさい顔貌<sup>かたち</sup>でほぼえんでいる

塔の上から見はらすゲドゥ高原  
地平の果てのメラピ火山の噴煙  
独立<sup>たつた</sup>という 挨拶がわりの言葉も  
いまはすたれた  
のどかな田園風景だが

もし軍靴がひびけば  
クメールのアンコール トムのように  
樹海はとざされ

あのいやらしい  
動物のような熱帯樹が

タコの足のように するすると伸び  
雨季にたつぷり水を吸いこんだ  
うす墨色の砂岩の楼閣や石像に

ぴつたりとだきついたり 吸いついたり しめつけた  
りして  
やがてばらばらに干涸びた  
もとの砂塵に還すであろうか

## 見知らない男

### 近藤計三

いい気なもんですな。

バス停前のテニス・コート<sup>コート</sup>を背に  
並んで待っていた男がひよいと話しかけてきた。  
流行<sup>はやり</sup>ですわね。

うっかり調子にのつて  
隣組というしつべ返しをくらつてはと  
俺は見知らない顔へそつなくこたえた。

おやじはあくせく勤めで  
かみさんはのんびり優雅なもんです。  
マン・リップでもやりますか。

俺は戸惑って眼をそらし  
白い女たちの球を追って走る傍らで  
幼児がひとり菓子袋を逆さにぶちまけるのを眺める。

そういえば

このおっさんだったな。  
いつか電車内で酔って嘔げていた。  
あれもヤケ酒の故か。

接待酒の果てか。  
ときたま雪まじりの風のなかに立つて  
定刻遅れのバスにいらだちながら

俺は剥き出しの脚の女たちに  
いつしかこいつのかみさんを探していた。  
やつとバスが角を曲ってみえると

見知らない男はくわえていた萁を踏みにじり  
列の間隔を詰めた。  
慣れきつたしぐさで並び直した。

## 北国

### 北本哲三

やがて、きつ立する岩壁。  
足もとに点在する岩礁。  
魔もののような波のうねりが、  
後から後から押しよせてきて  
真白なしぶきをあげて砕けている。

目をさますと、

窓をよぎって、無数の細かな白いものが

小さな虫のように

早い速度で飛んでいる。

すこし遠くに目をこらすと、

粉雪が降っていて、

その向うに灰色の海がある。

水平線は

くろい空と重なり合い

夕暮れのように

くろくかすんだ海がある。

一九七七、二月

## 消える

### 小宮隆弘

若者たち いづれの

いくさを 正義のいくさとよぶか

冷えた屍を積んできた おれたちに

たたかいの讃歌は消灯ラッパのうらかなしき

死はいつもじゆくじゆくと

密林のわずかな空間をとざしてもえた

戦友と

死の別離

敗れた戦場

もどってきた青春

有罪の日日

トンネルを抜けると、  
山すそにしがみつくように  
小さな家々。  
少しはなれて墓地があり、  
雪の中に肩をよせ合っている  
墓石や墓標。  
身慄いしているみたいなの  
くすんだ板張りの小さな学校。  
うねりくる灰色の波。  
くろい海に重なるくろい空。

午后、切通しをうそ寒い風が吹く

松林にかこまれた赤いレンガの煙突から

バーナーの火にやかれて

天にはいあがる

わが屍を

妻と

肩を寄せあつて

見る

この日を期して罪は亡びるか

どつと うっ屈したものがはじけて

くびまでひたっている

タイル張りの浴槽が鮮血に染まる

## 映り往く春に

菅沼瞭子

午後六時の  
副都心の八階から  
視降ろす地上に車の狂走。  
煙った視界に  
それでも野董色のすかれした春の匂いは  
年毎の記憶へと  
ひとを誘う。  
するといつもの夕暮の表情はざり落ちて  
匂いの彼方のなまめかしい三月に  
吸い込まれてゆく感覚。

点描画家の祖の描く景色のように

藍と紫と青の奥には  
過ぎた春に触れたひとのひとりひとりが  
地の上の共有の生を  
棲まわせている。そんな想いは  
わたしをどこまでも柔らかにする。  
重なり合うイメージの裏に  
一九××年三月の事象が浮かび  
私の感性の軌跡が  
その上をなぞる。

暮れてゆく一日の終りに  
息を殺して視つめる春。

## 野 銭

野銭、山銭等も納め候場所、田畑  
に開発を相願ひ候へ共

地方落穂集五

さかた しげし

町内会への入会費の徴収は廃止する。  
そこで、おれは会合をしめくくった。  
戸数四十軒のうち、出席は十三軒。  
小さな町内の年度末総会である。

議決のとき

微かなため息を、おれは確かに聴いた。

田や畑があつて子供さんには最適の環境です。  
不動産屋の口車にのつて  
とびこむような想いで移り住んで  
まだ、三年にもならぬおれを  
役員にしたてたのは誰だ。

気がねすることはないがな  
かつて入会のとき

燐寸一箱を出してもらったこともあつた。

土地の故老の囁きを

ふりすてるようにして

当日の議事録をまとめ

回覧のため

おれは明るい旧街道に出た。